

■ 編集だより

編集後記

各地域で開かれる精神科関係の研究会の出席者が徐々に減っているように感じ始めてから、もう幾久しい。しかも、最も勉強してもらいたい若手精神科医の出席が極めて少ないのは残念な限りである。一方、毎回きちんと出席して熱心に聴講しているのは年配の精神科医ばかりであるのはどうしたことであろうか。

もつとも、精神科関連の新薬が次々に上市され、それらの製剤にからんだ研究会が多すぎるのも辟易とする。週末に2つや3つの研究会が重なることも日常茶飯である。製薬企業主催の研究会のあり方については、もう少し工夫してもらいたいと考えているのは私だけではないであろう。売り込みたい製剤に好意的な演者を招いて、その長所のみを刷り込むような研究会をされても、出席者がだんだん減っていくのは至極当然かもしれない。一方で、薬剤師など精神科医以外の職種が出席している研究会に行くと、会全体の雰囲気は全く異なる。皆食い入るように講演者の話をメモしながら熱心に聞いていることが多い。講演する側としても、大勢の出席者が熱心に話を聞いてくれる方が良いのは当然であり、最近では多職種の方々を総動員している地域の研究会も多い。今や精神科医療はチーム医療が基本であるから、多職種の研究会出席によって医療機関全体のレベルが底上げされるならば、それはそれで喜ばしいことには違いない。

会が多くて大変なのは研究会ばかりでなく、学会も同様である。最近では、多数に分化した関連学会をできるだけ統合する方向にあり、それが不可能であっても、複数の学会を同時開催して、参加者の便宜を図ろうとする動きも見られる。そして、各学会とも会員数や参加者を増やすために、様々な工夫を凝らしている。最近、精神科関連学会でもよく目にするようになったのが、若手発表者の中から優秀演題賞や優秀論文賞を選んで、表彰する方式である。やはり人間は競争意識を煽られると頑張ろうとするし、そのことが会全体の活性化につながることもある。北海道精神神経学会も若手精神科医の参加が年々減っていくことに危機感を覚え、2年前から若手精神科医を対象に優秀演題賞を毎回選出する試みを始めた。若手医師の出席が急増したとは言えないものの、発表内容のレベルは確実に上がり、最後まで参加して優秀演題賞の発表結果に一喜一憂する若手医師の姿も増えて、ひとまず活性化の兆しは見えているようである。

先日、その究極の姿を北海道浦河町で開かれた第8回日本統合失調症学会(齊藤利和会長)に見た。当事者研究と自治的な運営で有名な「べてるの家」がある当地で開催された学会では、当事者が学会運営を手伝い、当事者が発表する多くのシンポジウムが組まれ、ランチョンセミナーから懇親会に至るまで多数の当事者が参加して、熱気に満ちあふれていた。そのパワーにただただ圧倒されながら、精神科医療とは何であるかということを変更して考えさせられた印象深い学会であった。これはやや特殊な例かもしれないが、結局のところは、研究会や学会に参加する人達の動機づけをいかに刺激するかが重要であり、その方法はいろいろと工夫できるのかもしれない。かくいう日本精神神経学会総会も専門医制度が導入されてからはポイント獲得という、やや外発的な動機づけではあるものの、非常に多くの会員が参加するようになり、一昔前とは様相が一変した。当然のことながら、参加者が増えれば、多方面からのフィードバックがかかり、学会プログラムの充実を図る努力も真剣になされるであろうし、事実、会を重ねるごとに親学会らしく内容が濃くなりつつあることは誠に喜ばしい限りである。最終的には、ポイント制度がなくても、内発的に参加したくなるような魅力的な学会が開かれることが理想ではあるが、現実には簡単ではないであろう。当分の間は、魅力的な「人参」を工夫するしかないのであろうか。

久住一郎